

# 列島保全への課題

明治政府は、鉄道や通信網の整備と合わせ、河川改修を国の直轄事業等により実施していくこととした。当初は舟運のため、河道を整備する低水事業を淀川・利根川・信濃川・木曾川・北上川・阿賀野川などを対象に行っていたが、鉄道整備によって舟運が衰えるなど、高水事業という洪水に対処するための事業に切り替えていった。この河川改修は水害被害の防止のみならず、農業の生産性にも寄与したことから、熱心に行われた。

信濃川は明治以降に本格的に治水事業が行われた河川である。越後平野は、信濃川や阿賀野川が運ぶ土砂により、比較的新しい時代に陸地化した低湿地で、川の水面より低い土地がかなりの面積を占めていた。田は深い湿田の状態であったし、洪水があると容易に氾濫するうえ、溢れた水がなかなか引かない状態だった。そのため、江戸時代から分水事業の提案はあったが、



大河津分水路と可動堰 (出典: 北陸地方整備局ホームページ)

## わが国、国土への働きかけの歴史⑥

京都を衰退から救った琵琶湖疏水



費用や全体の合意の困難さから、実現してこなかった。

1896年(明治29年)7月の「横田切れ」といわれる空前の大出水を契機に、大河津分水工事が始められたが、1927年(昭和2年)6月に河川法、1913年(大正2年)に運河法、19年に道路の洪水で大破し、改めて31年に可動堰として完成した。その後、越後平野は米どころとなつていったのである。

明治以降の治水には、その他にも木曾三川の完全分離、備された。

### 治水事業で農業生産向上も

淀川への琵琶湖からの出口である瀬田川の掘削や洗堰の設置、淀川放水路、全長22.5km、横浜港を近代化するなど

努力してきた。明治20年代から30年代にかけて、コンクリートブロックによる防波堤の建設が横浜、大阪、小樽などでも行われた。その後、わが国にも建設技術が蓄積され、関東大震災後、驚異的なスピードで横浜港の復旧を図り、防波堤の復旧にわずか9カ月、繋船岸の復旧にわずか19カ月といった記録も残る。

明治になってからの事業で触れておきたいのは台地の開発である。江戸時代まではもっぱら沖積平野や湖沼の周辺の開発を行い、堆積平野の中心で洪積層が台地化した洪積台

地には、水源が乏しいことから手がつけられなかった。明治になって大型工事による広域的な台地開発が可能となり、各地で大規模な用水事業が実施された。矢作川の水を引いて碧海台地を開発した明治用水、猪苗代湖から導水した安積疏水、那珂川からの取水による那須疏水、那須野ヶ原用水などの事業が有名で、それぞれ数千石にも及ぶ大規模な開発であった。

京都でも、琵琶湖からの導水による発電・水運・水道などを目的とする疏水事業が計画された。京都の人口は東京遷都を機に減り始め、江戸時代の約半分になり、京都を衰退から救う一大事業だった。

1885年(明治18年)、大学を卒業したばかりの田邊朔朗を設計監督として事業に着手し、第一疏水は90年に完成。この電力を用いて日本初

の市電(京都電気鉄道)が京都を走ることとなった。今日、南禅寺近くで勢いよく水が流れる疏水を見ることのできるが、千年の都に明治の水路が美しい水辺風景をつくりだしている様子をみるたびに、明治人の国土にかけた情熱を感じる。これらの事業により、農業用水や上水を確保し、農業用水や上水を確保し、現代への贈り物である。

数が刻まれている。他の2基は昭和8年の昭和三陸地震津波の記念碑で

大津波く、里てめけぬ 雄心もて以左追ひ進み 参の上らまし 英彦

と刻まれ、裏面には地震発生当初から津波の来襲の被災記録を記す。「すべて」と刻まれた残る1基の碑文が教訓を伝える。

一、ヂシンガシタラバユダシノスルナ  
一、ヂシンガアツタラタカイトコロニアツマレ  
一、ツナミニオハレタラタカイトコロニアガレ  
一、チカクノタカイトコロヲヨウイシテオケ  
一、オカミノサダメタヤシキチヨリヒクイトコロニ家ヲタテルナ

参考: 国土交通省東北地方整備局道路部ホームページ「津波被害・津波石碑情報アーカイブ」

#### 碑の記憶④

##### 3基の碑

岩手県田野畑村島越(しまのこし)の広福寺に昭和8年の昭和三陸地震津波の記念碑など3基が並んで立つ。古い碑は明治29年の明治三陸地震津波に際し同31年に建立された「三陸海嘯横死者招魂碑」。宮城、岩手、青森3県の死者や流失家屋



津波八年昭和 津波八年昭和 津波八年昭和  
津波八年昭和 津波八年昭和 津波八年昭和  
津波八年昭和 津波八年昭和 津波八年昭和

国土と日本人 災害大国の生き方 大石久和著

本書では日本の国土の地形的・社会的特徴や国土への働きかけの歴史が明らかにされています。日本人は今、何を考えるべきか、に気づくことが出来る好著。発行: 中央公論新社 定価: 882円(本体840円)